

報告書

第2回読書懇談会「徳島における若者読書文化の形成」の報告

～徳島大学総合科学部・地域交流プロジェクト
「徳島における若者読書文化形成プロジェクト
—地域と他大学連携によるビブリオバトル（知的書評合戦）の実践から—」より～

依岡隆児（代表），真壁和裕，笹尾佳代，齊藤隆仁，佐々木奈三江

2015年3月

目次

はじめに	1
1 地域交流プロジェクト「徳島における若者読書文化形成プロジェクト—地域と他大学連携によるビブリオバトル（知的書評合戦）の実践から—」について 依岡隆児（徳島大学総合科学部教授）	2
2 これまでの読書啓発活動 依岡隆児（総合科学部教授）	3
3 大学における読書レポートの取り組み 井戸慶治（総合科学部教授）	7
4 阿波ビブリオバトルサポーター2014 年活動報告 （総合科学部4年生）	11
5 大学図書館における読書啓発の取り組み 佐々木奈三江（附属図書館司書）	13
6 教養ある学生になるために精読と多読が必要なわけ〜クリティカルリーディングの授業を通して 真壁和裕（総合科学部教授）	16
7 創造的読書に向けて—「謎とき読書」実践報告 笹尾佳代（総合科学部准教授）	19
8 大学教育における読書の位置付けを考える 齊藤隆仁（総合科学部准教授）	22
9 第2回読書懇談会「徳島における若者読書文化の形成」の意見交換会報告 （総合科学部4年生）	25
おわりに	29

はじめに

近年、若者の読書をめぐる状況はますます厳しさを増している。残念ながら、この読書離れの傾向は徳島県も例外ではない。たしかにこうした日常生活における読書の相対的地位低下は、IT技術によって情報に容易に触れられるようになった結果かもしれない。しかしその反面、こうした状況が続けば若者は、従来なら読書活動が担ってきたであろう創造性・主体性を涵養する機会をもてないまま社会に出ていくことになりかねない。このような現状に対して、徳島大学でもささやかながら読書推進活動を展開してきたところである。

その一環として、平成27年2月23日（月）に、徳島大学総合科学部地域交流プロジェクトである「徳島における若者読書文化形成プロジェクト—地域と他大学連携によるビブリオバトル（知的書評合戦）の実践から—」に関する懇談会を開催した。本冊子はプロジェクト・メンバーならびにこの読書懇談会の報告者や参加者から寄稿してもらい、今年度の活動報告を行い、広く供覧に付すものである。

本報告書の目的は本年度の「徳島県における若者読書文化の形成プロジェクト」の総括をすることである。徳島県下で読書推進に取り組む方々にとって参考になれば、幸いである。

平成27年3月30日

プロジェクト代表 依岡隆児

1 地域交流プロジェクト「徳島における若者読書文化形成プロジェクト—地域と他大学連携によるビブリオバトル（知的書評合戦）の実践から—」について

依岡隆児（総合科学部教授）

本プロジェクトは、平成25年度に引き続き、平成26年度徳島大学総合科学部学部長裁量経費「地域交流プロジェクト」として、採択されたものである。本を紹介し合うという「ビブリオバトル」*の活動を中心に、徳島における若者読書文化形成を目指してきた。

徳島大学の入学前学習や大学入門講座などの授業でビブリオバトルを計画するとともに、すでに第2回目を開催した「ビブリオバトルin徳島」を恒例化し、さらにまたビブリオバトル全国大会にも徳島から出場者（バトル）を送り出すことを一つの目標としていた。そのため、企画・運営を行う県下の学生・教職員からなる組織「阿波ビブリオバトルサポーター」を支援し、ビブリオバトル全国大会に継続的に参加する体制を整え、県内の学生たちによる持続的な活動を形成しようと努めてきたところである。今後はさらに、小・中・高等学校にも活動の輪を広げていく計画である。

また本プロジェクトが開催した読書懇談会は、こうした読書文化を形成するために、ビブリオバトルを中心に徳島における若者読書文化の普及をはかってきた活動について、関係団体とともに振り返りながら、今後の課題を確認し、さらなる協力体制を整えていくためのものだった。

ここでは、この平成26年度総合科学部学部長裁量経費「地域交流プロジェクト」について、まず簡単に以下のように概略を報告しておきたい。そのうえで、後の各節で関係者から詳しく報告してもらおうこととする。

プロジェクト題目は「徳島における若者読書文化形成プロジェクト—地域と他大学連携によるビブリオバトル（知的書評合戦）の実践から—」で、メンバーは総合科学部の依岡隆児教授、真壁和裕教授、笹尾佳代准教授、齊藤隆仁准教授と附属図書館司書の佐々木奈三江だった。

<目的>

本プログラムは、本を紹介し合うという「ビブリオ

バトル」を定期的で開催しながら、徳島における若者読書文化形成を目指すもので、地域と大学の連携によって徳島県の読書文化の振興と活性化をはかり、あわせて大学の授業を活用し、学生の質問力、説明対話能力を向上させることを目的とした。

<実施内容の報告>

本プログラムは、大学授業での実践のほか、以下のような徳島県下でのイベント開催などを支援し、関連団体との協力体制を構築してきた。

まず徳島県下の大学の学生・教職員からなる組織「阿波ビブリオバトルサポーター」を支援した。また徳島県立文学書道館主催で「阿波ビブリオバトルサポーター」による企画運営による「ビブリオバトルin徳島」（8月24日）開催に協力した。この大会はメディアでも取り上げられた。さらにビブリオバトル全国大会のための徳島・香川地区決戦を11月30日に徳島大学総合科学部地域連携小ホールにて開催した際には正式に後援し、同全国大会への代表を選出した。本大会には依岡、佐々木が参加し、「阿波ビブリオバトルサポーター」のメンバーとともに観戦し、その後、関連の面々と交流を持つことができた。

その締めくくりとして、平成27年2月23日に徳島県下の関連団体とともに第2回読書懇談会「徳島における若者読書文化の形成～徳島大学総合科学部・地域交流プロジェクト『徳島における若者読書文化形成プロジェクト—地域と他大学連携によるビブリオバトル（知的書評合戦）の実践から—』の報告より～」を総合科学部第1会議室にて開催し、本プログラムの活動について報告した。約25名の参加者があり、附属図書館と徳島県立文学書道館、徳島市立図書館、徳島県立図書館、徳島県教育委員会、城東高校、鳴門市立図書館からの出席者を得て、徳島県の若者読書文化形成のための意見交換を行った。なお、この懇談会については報告書を作成し、県下の関連組織に配布することにした。この懇談会のプログラムは以下の通りだった。

日時：平成27年2月23日（月）17時～19時10分

場所：徳島大学総合科学部1号館第1会議室

発表内容：

1 開会のあいさつ 活動報告 依岡隆児（総合科学部教授）

2 ビブリオバトル活動報告 齊藤桃子（総合科学部4年生）

3 大学における読書レポートの取り組み 井戸

慶治（総合科学部教授）

4 大学図書館における読書啓発の取り組み
佐々木奈三江（附属図書館司書）

5 意見交換会（パネリストは上記のメンバーとゲスト
パネリストの図書館，文学館，関連団体の方々）

6 閉会のあいさつ

<その社会的効果>

本活動も2年目を迎え、県下の関係者との交流もスムーズに行うことができた。協力体制も構築されつつある。また「阿波ビブリオバトルサポーター」の組織を後援することで、徳島県内の学生たちによる持続的な活動を形成することにある程度、寄与できたことと思う。また従来、文化イベントは盛んに行われているが、ただ個々になされるために広がりには欠け、せっかくの活動が停滞しているという印象を与えがちだった徳島県下の文化の現状を変えるべく、組織を超えた文化関連施設・機関を横につなぐという役割もある程度担うことができたものとする。ただ、当初の目標の一つだった他大学との連携については十分な成果をあげることができなかった。

*注

ここでいう「ビブリオバトル」とは、誰でも（小学生から大人まで）開催できる本の紹介コミュニケーションゲームのことである。「人を通して本を知る。本を通して人を知る」をキャッチコピーに日本全国に広がる。小・中・高校，大学，一般企業の研修・勉強会，図書館，書店，サークル，カフェ，家族の団欒などで広く活用されている。

2007年に京都大学情報学研究科の研究室で始まり、全国に広まり、書店の紀伊国屋や東京都などがコンテストを公開で行うようになった。東京都の「言葉の力」再生プロジェクト・イベントの「ビブリオバトル首都決戦」はテレビでも放映されるなど、話題となった。

参考文献：谷口忠大『ビブリオバトルへ本を知り人を知る書評ゲーム』文藝春秋，2013年。

参考ホームページ：<https://sites.google.com/site/bibliobattle/>

2 これまでの読書啓発活動

依岡隆児（総合科学部教授）

ここでは本総合科学部学部長裁量経費「地域交流プロジェクト」の代表である依岡が関わってきた、ビブリオバトルも含む読書啓発活動の取り組みについて報告する。

主として私が関わってきた活動は、

- ① 附属図書館の学生協働組織ライブラリー・ワークショップと阿波ビブリオバトルサポーターでの取り組み
- ② 大学の授業「名著講読」「比較文化演習」「メディア・リテラシー」「読書コミュニケーションへの誘い」の実施
- ③ 2013年度懇談会「徳島における若者読書文化の形成」の実施

である。

① 附属図書館の学生協働組織ライブラリー・ワークショップと阿波ビブリオバトルサポーターでの取り組み

まずライブラリー・ワークショップについてであるが、徳島大学附属図書館での学生協働の一環として活動している。私も創設当時から関わってきたが、活動の詳細は後の章で触れられるので、そちらに譲るとして、ここではこのサークルが図書館を中心にした学生主体の読書啓発活動の出発点となったとだけ述べておきたい。

次に阿波ビブリオバトルサポーターだが、徳島におけるビブリオバトルの組織として2013年に結成され、活動を展開している。2014年度には大学のサポート系サークルとしても位置付けられている。

- ブログ <http://awabiblio.blogspot.jp/>
- ホームページ <http://bibliobattle-in-to-kushima.jimdo.com/>

このサークルの活動については第4章で報告があるので、ここでは2013年度に実際された「ビブリオバトルin徳島」とビブリオバトル首都決戦への取り組みについて報告する。

「ビブリオバトル in 徳島」(2013年)について

徳島で初めてのビブリオバトル大会の公式開催となったのが「ビブリオバトルin徳島」である。以下、この記念すべき大会について実施報告をする。

2013年6月23日(日)に徳島県立文学書道館主催で、徳島大学附属図書館、徳島市立図書館、阿波ビブリオバトルサポーター共催で開催された。



図1 「ビブリオバトルin徳島」のチラシ

発表者は15人で 来場者はのべ約100人(発表者、マスコミ含む)だった。企画運営スタッフは学生、教職員、文学書道館職員など20人だった。

4会場に分かれそれぞれ3~4人で予選を行い、その後決戦を予選を勝ち上がってきた4人がその後、決戦を競い合った。徳島大学医学部1年の別所君が優勝した。

反響としては、朝日新聞、徳島新聞、四国放送、タウン徳島、ユーストリームなどのマスコミ取材があった。さらに四国放送「ゴジカル」2013年6月27日での放映や、NHK徳島放送局「とく6徳島」2013年6月27日での放映され、YouTube：<http://bibliobattle-in-tokushima.jimdo.com/>で配信された。

県下初のビブリオバトル大会ということで、ビブリオバトル自体を認知させるという当初の目標は達成できた。マスコミ各社がこの大会を大きく取り上げたことも大きかった。ただ初めてということで、バトラー集めには苦労した。一般の方もたくさん来席し、潜在的な読書ファンの大きさに気づかされることとなった。アンケートでは、またやってもらいたいとの意

見が多く寄せられた。大学と文学書道館との協働の試みも大きな成果だった。

ビブリオバトル首都決戦への取り組みについて

次に、ビブリオバトル首都決戦に徳島県から初出場を目指して、阿波ビブリオバトルサポーターが中心になって、予選会、地区決戦を行い、首都決戦に代表を送り込むことができた。

徳島・香川で地区決戦をすることとなり、阿波ビブリオバトルサポーターが地区決戦の主催団体となった。

9月から3回の地区予選(9月28日(土)紀伊国屋書店、9月30日(月)大学附属図書館、10月5日(土)徳島大学生協にて開催)と10月に地区決戦(10月26日(土)徳島市立図書館にて開催)を行い、11月24日(日)の首都決戦(東京)へと進んだ。徳島の予選を勝ち上がった西森君(鳴門教育大学大学院生)が特別賞を受賞した。

阿波ビブリオバトルサポーター主催の予選や地区決戦の企画・運営は思いのほか大変だったが、なんとかバトラー(参加者)も集めることができた。質の高いバトラーのプレゼンテーションもあった。また紀伊国屋書店など学外での開催もビブリオバトルを一般に広め、その魅力に触れさせる機会となった。

② 大学の授業「名著講読」「比較文化演習」「メディア・リテラシー」「読書コミュニケーションへの誘い」の実施

次に授業での取り組みであるが、私の担当している3・4年生対象のゼミ(比較文化演習)では毎週、一冊本を読んできて、それを3分程度で説明することになっている。年に一回は勧めたい本のPOPを作成させ、披露しあうPOPコンテストも開催している。また年によってはその紹介した本のレコメンドを書かせ冊子にすることもあった。受講生や卒業生からの反応は、概ねよい。読書の習慣作りとなったとか、ゼミのメンバーが紹介する本に興味を持ったとか、実際にそれを読んでみたという意見が寄せられ、読書のきっかけとその継続に効果があったものと思う。

また全学共通教育の共創型科目の一つである授業で「名著講読」を担当している。齋藤孝の提唱した「三色ボールペン方式」で毎週違ったテキストを読んできて重要な点や興味を引かれた点などを披露しあう読

書会をやっている。そのなかで、各学期1回は本の読みどころを紙片に書く「POP ポップ」を学生たちによってこさせて、それを片手に本の紹介をするというコンテストもやっている。

以下、2010年度に私が担当した「名著講読～世界の見方」の授業報告を参考までに載せておく。

名著講読-世界の見方 - 文学作品や科学随筆を読む-

前期 月曜日 7・8時限 担当：依岡隆児・教授

【授業の目的】

本を読む習慣をつけることが第一の目的である。寺田寅彦の随筆から『不都合な真実』までの古今の名著に触れ、現代社会で重要となる「世界」の多面的な捉え方について、社会人の方も交えて一緒に考え、互いに読み方や考え方の違いに触れることで、より深い理解が得られるようにする。

【授業の概要】

「世界」の見方をテーマに、古今東西の名著を分野にとらわれずにバラエティ豊かに取り上げ、線を引きながら一緒に読んでいく。内容を確認したうえで、お互いに興味を引かれた箇所を披露しながら、理解を深める。必要事項の検索ができるようにして、最後にはグループで発表を行う。また、図書館ツアーも実施する。この年は、一般学生34名、社会人6人の受講生だった。

【授業内容】

毎回違う作品の一部のコピーを三色ボールペン方式で読む。取り上げた作品は、池田香代子『世界がもし100人の村だったら』、寺田寅彦『柿の種』、ユクスキュル『生物から見た世界』、エンデ『モモ』、ヘッセ『デミアン』、鈴木孝夫『日本語と外国語』、ゴア『不都合な真実』、青木保『多文化世界』など。

最後の4回でグループ分けし、テーマ選定、文献に基づいた発表準備をし、最終回にグループ発表を行った。

【授業の成果】

アンケートからは、学生たちがいろいろな分野の本を幅広く読むことができた、他の世界に触れることができた、自分とは違う読み方を聞いて面白と感じたという感想が多数あった。同じテキストでも、読んで

気になったところを披露しあっていると、同年代の者同士でもこんなにもとらえ方が違うのか、と受講生たちは感じるようになる。自分と違う価値観・ものの見方を、テキストからのみならず、他の受講生の発言からも学ぶ場となっている。さらに授業に参加している社会人の方々のコメントも学生にとっては違う世界に触れる絶好の機会になっている。一冊の本をめぐって異分野・異世代の人たちと自由に意見を交わすというコミュニケーションスタイルは、学生たちにとって読書の幅を広げる効果があったと思われる。



図2 POPコンテストの記念写真(附属図書館にて。2010年11月22日)

以上、授業「比較文化演習」「名著講読」での試みについて報告してきた。こうした読書会形式でできるだけリラックスした雰囲気では本をめぐって互いに意見を言い合うことで、受講生たちは自分とは異なる見方に触れ、新しい読み方への気づきが得られているといえる。「名著講読」は当初は受講生5名程度でスタートしたが、ここ4、5年は受講者調整を行わなくてはならないほど受講希望者が増えていて、軌道に乗っている。5名程度の社会人の方々に参加いただき、学生たちとともに作業してもらっているのも世代を超えた意見交換の機会になり、大きな意義があるだろう。

2013年度前期・全学共通教育共創型科目「メディア・リテラシー」(吉田敦也、依岡隆児、齊藤隆仁、佐々木奈三江)においては、ビブリオバトルのトーナメントを授業で行った。本授業はメディア・リテラシーの授業なので、ここではソーシャルメディアの観点も取り入れて、新しい形の読書会のあり方を実験してきた。スカイプでの対戦(宮城教育大と、2013年7月18日)を実践したときの学生の感想を見ると、最初はビ

ブリオバトルに尻ごみしていた受講生も最終的には満足しており、新しい本との出会いやプレゼンテーション能力の養成に効果があったとの感想があり、一定の効果があったといえる。

徳島大学の授業としてはさらに、2014年度に新設された「読書コミュニケーションへの誘い」があるが、これについては、後の章で報告があるので、ここでは省略する。

③ 2013 年度懇談会「徳島における若者読書文化の形成」について

2013 年度の総括として、第 1 回懇談会「徳島における若者読書文化の形成～徳島大学総合科学部・地域交流プロジェクト『徳島における若者読書文化形成プロジェクト—地域と他大学連携によるビブリオバトル（知的書評合戦）の実践から—』の報告より～」を開催した。以下、その記録である。（総合科学部学生・大西真央の記録による）

日時：平成 25 年 12 月 19 日（木）17 時～18 時半

場所：徳島大学総合科学部 1 号館第 1 会議室

発表内容：

○開始に先立ち、総合科学部長 平井先生より挨拶

○発表内容の概略

1. 依岡隆児（総合科学部教授）「活動報告」

- ・上からの押しつけ（先生の紹介）では本を読まないが横からの紹介（学生同士）であれば本を読む、という事実がある→ビブリオバトルの有効性
- ・あちこちで行われている読書振興の活動について連携をとっていくことが今後必要ではないか。

2. 山下沙綾（総合科学部 4 年生）「ビブリオバトル活動報告」

- ・ビブリオバトルについての説明
- ・徳島でのビブリオバトルの開催状況
- ・今後の課題は、下の世代へ引き継ぐこと、徳島県下の他大学との連携。

3. 齊藤隆仁（総合科学部准教授）「高大接続の試み」

- ・読書に関する大学の取り組みとして「読書レポート」を紹介。

4. 佐々木奈三江（附属図書館司書）「図書館における取り組み」

- ・徳島大学附属図書館での取り組みについて紹介。

5. 意見交換会

<パネリスト>

計盛さん（徳島県立文学書道館 事業課主事）

中野館長（徳島市立図書館）

谷上さん（鳴門市立図書館 ボランティア）

水上さん（徳島県立図書館 調査相談課課長）

飯田さん（文化スポーツ立県局とくしま文化振興課 課長補佐）

長谷川さん（NPO 法人びざん大学理事長）

依岡、佐々木

<主な意見>

◆中高生によるビブリオバトルを導入したい、という意見が多く出た。

→阿波ビブリオバトルサポーターとの連携、あるいは来年度開講するビブリオバトルの授業との連携で可能になるのでは？

県立図書館は以前にビブリオバトル企画を検討したことがあったが実現しなかった。県立図書館と関係の深い県立高校では実施（城東高校）できた。そういった方面で何かできるかもしれない。

徳島市立図書館は、高校生のビブリオバトルを検討中。現在市立図書館で活動している中学生ボランティアなどで実施したいが、動けるかどうか。

徳島県文化スポーツ立県局とくしま文化振興課でも、中高生の読書についてなにかできないかと検討し、依岡先生に相談したところ、本会を紹介された。

◆徳島市立図書館では、ビブリオバトル地区決戦についての展示コーナーを設置。好評でいつも貸出中となっている。ビブリオバトルが読書振興に役立っている実感がある。

◆徳島市立図書館で社会人のビブリオバトルについて要望があり、NPO法人びざん大学の長谷川理事長の家族が市立図書館の職員であることから、びざん大学で今後実施する見込み。

◆イベント型のビブリオバトルを開催するのはやはり負担で腰が引ける。コミュニティ型の小規模なビブリオバトルが広がり、あちこちで気軽に開催されるようになった方が、文化としては強固なものになると思う。

→もともとのビブリオバトルは小規模で行うものだったので、イベントにこだわる必要はない。

ただし、知名度をあげる、という意味ではイベントも必要。

◆ビブリオバトルはよいものだと思うが、個人的な活動である「読書」とはやはり違うので、読書とは一緒に括らずに広めた方が受け入れられやすいと思う。

※このあと、阿波ビブリオバトルサポーターによるビブリオバトルデモンストレーション実施。

この2013年の懇談会は県立図書館、徳島市立図書館、鳴門市立図書館、文学書道館、徳島県文化スポーツ立県局とくしま文化振興課、びざん大学、大学生生協などの方々の参加を得、読書啓発という同じ目標のもと協力体制を築く第一歩となった。また懇談会後に阿波ビブリオバトルサポーターによるビブリオバトルの実演会も好評で、初めてビブリオバトルを見た参加者の中にはその面白さに気づく機会となった方もいたようだ。

以上、読書啓発活動の依岡の授業での取り組み、阿波ビブリオバトルサポーターの2013年度の活動、ならびに第1回懇談会「徳島における若者読書文化の形成」について報告した。読書文化形成のための活動は学内外で展開され、学生参加型の取り組みとして徐々に浸透しつつある。特にビブリオバトル自体の認知度もここ数年で向上した。この読書推進プロジェクトも微力ながらそれに貢献しえたと思ふところである。ここではこうした従来の活動を振りかえってみたが、それが今につながっていることをある程度は跡づけられたのではないだろうか。本年度のプロジェクトの前史として、記録する価値があると思われたので、ここに掲載した。

3 大学における読書レポートの取り組み —新入生はどんな本を選んだか—

井戸慶治（総合科学部教授）

はじめに

徳島大学共通教育センターでは、いくつかの学部で協力する形で、過去二年間において「読書レポート」の取り組みをおこなってきた。この企画では、どちらかと言うと学生の「読書」の促進よりも「レポート」を書かせる方に主眼があったと思われるが、ここでは冊子の趣旨にしたがって、最近の学生の読書傾向に重点を置く形で「読書レポート」について報告したい。

1. 自由に本を選ばせた一年目

三年前に着任された古屋玲先生が、本学の先生方への精力的な聞き取りにより学生の学力の問題点を調査したところ、学部を問わず、また文系理系を問わず、学生の文章力が弱いということが明らかになった。そこで齊藤隆仁先生や古屋先生らを中心に、主として4月におこなわれる「大学入門講座」の枠組みの中で、新入生に本を読ませてレポートを書かせるという「読書レポート」の企画が始まった。一年目の2013年度は医学部栄養学科、歯学部、工学部のいくつかの学科で実施され、本の選択はまったく学生の自由に任された。課題が与えられるだけの高校までの学びからの脱却をめざしたためである。またレポートの内容については、単なる感想でなく、自己の意見の明確な提示とその説得力ある根拠付けを求めた。さらに提出されたレポートには、学生の所属学部と共通教育センターから各一名ずつ計二名の教員がコメントを書くこととした。これは、正解はひとつでないことや意見の多様性を実感させるための意欲的な試みであった。

このときに学生が選んだ本の上位10位までを、以下に示す（数字は選んだ学生の人数）。

- 1) 小川洋子『博士の愛した数式』新潮文庫 8
- 2) 百田尚樹『永遠のゼロ』講談社文庫 6
中里見博『憲法24条+9条—なぜ男女平等が狙われるのか』かもがわブックレット 6
- 3) 湊かなえ『告白』双葉文庫 5
- 4) 外山滋比古『思考の整理学』ちくま文庫 4
伊坂幸太郎『重力ピエロ』新潮文庫 4
結城浩『数学ガール』ソフトバンククリエイティブ 4
長谷部誠『心を整える』幻冬舎 4

東野圭吾『容疑者 X の献身』文春文庫 4 (ただし、東野圭吾の本全体では26)

安田雪『ルフィの仲間力』アスコム 4

綿谷りさ『蹴りたい背中』河出文庫 4

600名以上の学生が選んだにしては数字が小さく、非常に分散しており、1位ですら8名、4位ではすでにわずか4名で7冊が同率順位になっている。ジャンル別では小説が多く、最近書かれた流行小説・娯楽小説の類いで、その多くがテレビドラマや映画、アニメの原作本である。日常生活の延長上で、読みやすい本を選ぶ傾向があると言える。これに対して、古典、名著、外国文学は非常に少ない。今の学生には、かつてと比べると「背伸びして小難しい本を読む」ということがないようである。彼らには、「読むべき本」のリストやスタンダードの本のようなものはあまり提示されたことがないのかもしれない。図書館と生協が共同で出している冊子『新入生にすすめる私のこの一冊』では、本学教職員が図書を推薦しているのが、その中でも名著や古典は4,5冊ほどである(2014年度版)。今後はより多くの名著、古典の推薦が望まれる。とはいえ、憲法や原発問題など、社会問題を扱った本を選んだ学生も若干見られた。

レポートとの関連では、次のような問題点も明らかになった。それは、選ばれた本の中に、単に方法を扱った本や実用書、推理小説など、レポートの対象としてふさわしくないもの、それに値しないものが比較的多かったということである。実用書などの例を書名のみ挙げてみる。『「大学時代」自分のために絶対やっておきたいこと』『新聞で学力をのばす』『人は話し方で9割変わる』『Twitter使いこなす術』『記憶を強くする』『算数・数学が得意になる本』『大学生のための知的勉強術』『バカの話は必ず長い』『わかりやすさの勉強法』『独学術』『わかりやすく伝える技術』『心が折れない働き方』『ストレスに負けない生活』『頭がよくなる思考術』『合格を勝ち取る睡眠法』『1分で大切なことを教える技術』『ハーバード流交渉術』『記憶する技術』『予測で「読解」に強くなる』『頭がよくなる思考術』。受験勉強のために買っていたのをそのまま使ったのではないかと思われるものもある。役に立つ本もあるだろうが、それが必ずしも論じるに値する本とは限らない。論じるに値しない、意見・批評を書くに値しない、またはそれにそぐわない本もあるということを書者ははじめて実感した。そしてそのような本を選ぶ学生が多いということ、われわれは企画段階では予想していなかった。このよう

な本を選んだ学生は、レポート(一步譲って読書感想文としても)とは何か、どういうことを書くものなのか、を考慮しなかったと思われる。「自由意志で任された責任を学生が受け入れて選択したかは疑問」との意見をアンケートで寄せられた先生もいる。また、それ以前の問題として、そもそも本を読んだり選んだりする経験が少ないのではないかとも思われた。「読書を全然しなかった自分が読書の楽しみを知ることができた」と書いた学生もいる。

レポートの出来については個人差が大きく、十把一絡げに評価はできない。しかし、相当多くのものについて批判的態度の欠如という傾向が見られた。教員へのアンケートの自由記述の回答には、次のようなものがあった。「ほぼすべてのレポートが筆者の意見に賛同していたのが気持ち悪かった。批判的意見を書くマイナス点になると誤解しているのでは。」

また、対象が小説の場合、登場人物に感情移入した情緒的な表現が多いということも言える。「妻のもとに帰るため必死に戦術を磨いて必死で生き抜こうとしている主人公官部の姿には感動して涙が止まらなかった」(『永遠のゼロ』に関するレポート)、「この小説の後半は涙なしには読めませんでした。ストーリーの前半は大貫の傲慢な振る舞いに腹が立ち、他の個性の強い登場人物にかき回され[・・・]」のようなケースである。

しかし、これは学生の責任ではないのかもしれない。それが高校までの読書感想文ではあまり問題視されなかったからである。たしかに国語教育の中では、接続詞の問題など、論理的思考が要求されるような場合もあるのだが、それが必ずしも批判的精神とはつながっていなかった。情緒的なものやいわゆる美談をよしとする傾向は、読書感想文や弁論大会など教育関係の場のみならず、新聞やテレビ、一般の社会にも見られるが、それは場合によっては異なる意見を発することが極度に困難な全体の雰囲気醸成することもある。

とはいえ、感情移入や本の内容への没入は、必ずしも斥けられるべきことではない。書かれた内容を十分に理解するためには、まずは少なくとも一時的に自分がその本の側に立つ必要がある。その結果、読んだ直後は誰しもやはりその本と同様の意見になりやすい。必要なのは、しかるのちにいくらか距離を置くこと、別の観点からも対象を見ることであろう。

2. 推薦図書から選ばせた二年目

二年目である2014年度においては、歯学部と総合

科学部で「読書レポート」が実施された。上述のような反省を踏まえて、5冊（医療系、哲学他）と180冊（すべて新書本）と数や種類は異なるが、いずれの学部も対象となる本を推薦図書に限定した。また、歯学部では昨年同様二人の教員によるコメントをおこなったが、総合科学部では、関係スタッフが全体に目を通した上で、総評と学生相互の簡単な評価をおこなうにとどめた。さらに、いずれの学部でもレポート指示書の説明にとどまらず、事前にレポートの書き方に関する講義がおこなわれた。「意見とは何かということ、それを言うための方法論も同時に示すのがよいのでは」「一般的なレポートの書き方を教えておくことが必要」などの教員アンケートの意見があったためである。

歯学部の推薦図書は以下の通りで、医療系が2冊、古典が1冊、人文社会系が2冊である。

- 1) 津田敏秀『医学的根拠とは何か』岩波書店, 2013年
- 2) 佐伯晴子『あなたの患者になりたい: 患者の視点で語る医療コミュニケーション』医学書院, 2003年
- 3) プラトン『メノン』藤沢令夫訳, 岩波書店, 1994年
- 4) 堤未果『政府は必ず嘘をつく: アメリカの「失われた10年」が私たちに警告すること』角川マガジズ, 2012年
- 5) 佐々木毅『学ぶこととはどういうことか』講談社, 2012年

一方、総合科学部の推薦図書については、「論理的な本を読ませて論理的な文章を書かせる」という基本方針で、新書（岩波、中公、筑摩、講談社現代、ブルーバックスなど）に限定し、以下の基準で教員有志約二十名が約180冊を推薦図書として選んだ。

- 1) 『超整理法』のような、方法を扱った本や単なる入門書は除外する。
- 2) 議論が分かれている問題を扱った本、出版されることで議論が沸き起こったような本。
- 3) 題名が知的な面白さを感じさせる本。

結果として、総合科学部の新入生が選んだ本の上位10位までは、以下の通りである（数字は選んだ学生の人数）。

- 1) 養老孟司『バカの壁』新潮新書 13
- 2) 竹内薫『理系バカと文系バカ』PHP新書 8
平田オリザ『わかりあえないことから』講談社現代新書 8
- 3) 杉浦由美子『女子校力』PHP新書 7

- 4) 鷲田清一『じぶん・この不思議な存在』講談社現代新書 6
川島浩平『人種とスポーツ』中公新書 6
- 5) 竹内薫『99%は仮説』光文社新書 5
井田徹治『ウナギー地球環境を語る魚』岩波新書 5
秋道智彌『クジラは誰のものか』ちくま新書 5
阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書 5
暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波新書 5

1年目の場合と同じく顕著な偏りはなく、散らばりが大きいと言える。ひとりも選ばなかった本は180冊中60冊ほどで、全部で270名の学生が120冊を選んだことになる。また、理系学生が文系の本を、文系学生が理系の本を選ぶケースも多々見られた。180冊という推薦図書の数については、学生へのアンケートで「多すぎる」の回答が多いと予想していたが、「適当である」の意見が64%、「もっと多くてもよい」が22%であった。選択肢が多いのは問題ではないようだ。また、新書でよいかとの問いには、75%の学生が「よい」と答えたが、これは教員へのアンケートの回答の半数が「新書以外も加えるべき」という意見だったのとかなり異なる結果となった。コメントについては、「コメントや添削指導を」という学生は57%で、そのうちの15%が採点をも望んでいた。教員へのアンケートでは8人中6人がコメントした方がよいと答えている。また、学生への自由記述を求めるアンケートで、「何に苦労したか」との問い（複数回答可）への答では、選んだ本の読解に困難を覚えた学生が意外に多かった。新書は特に予備知識がなくてわかるように書かれているはずなのだが、論理的な文章としてこの程度のものも読んだことのない新入生が若干いるのかもしれない。前年度の結果も総合すると、一般に読書の習慣がないか、読みやすいものだけを読む学生が増えているようである。

筆者の所属は総合科学部なので、その結果について引き続き述べる。総合科学部で提出された「読書レポート」を不出来な順でだまかに分類すると次のようになる。

- 1) 怠慢。字数が非常に少ない、どこかからコピーした表やグラフでかなりの紙面を埋めている、など。
- 2) 文章表現や論理構造に顕著な問題が見られるもの。
- 3) 本の内容と自分のオリジナルの部分の区別がまったくなされていないもの。
- 4) 出典表示などはあるものの、それが自分のオ

リジナルに見せかけた部分も、実は本の意見やデータであるというもの。

5) 文章表現や引用の仕方、出典表示などで大きな問題がなく、主張とその根拠付けもしっかりしているもの。

1) と 5) は少なく、2) は若干あり、3) と 4) は非常に多かった。

他者の著作を参照・引用するさいのルールは、事前の講義の中で強調され、わかりやすく説明されていたのだが、この点で問題のあるレポートが多かったということになる。参照・引用のルールについて、学生は高校までの段階でほとんど教えられておらず、本やインターネットで調べたことを参照表示なしに発表してもあまり咎められることはなかったであろう。それで、この点が実践としては急にはできなかったのではないかと思われる。

以上のことから、「読書レポート」の位置づけとしては、論理的思考や学術的文書作成への「端緒、きっかけ、橋渡し」というのが適当ではないかと考える。つまり一回の講義や実践ではなかなかそれまでの習慣は変えられないし、単発では効果がない。それ以降、初年次ゼミ・全学共通教育や専門の授業を経て卒業研究へといたる中でライティング教育を継続し、一度に多くを望まず、徐々に学生への要求レベルを上げてゆくのによいのではなかろうか。もっとも、文章力については個人差が大きく、入学当初からよくできる学生も少数ながらいるので、そのような学生の意欲をそがない配慮も必要であるが。

3. 今後に向けて

前項で提示したアンケート結果などを受けて、来年度は総合科学部でも教員によるコメントをおこなうのがよいであろう。その場合、学生が対象として選んだ本を教員は読まなくてもコメントできる、との意見もあるのだが、教員アンケートでは以下のような厳しい指摘もあり、教員も読んだ方がよいと筆者は考える。「学生が本気で書いてきたレポートに向き合うためには、自分もその本を読む必要がある。」「コメントに当たり、対象となる書籍の内容についてきちんと把握する必要がある。コメントーターが読んだこともない本についてわかったふりしてコメントするのは、結局学生を愚弄している。」

このようなコメントをおこなう場合、問題になるのはその負担である。この点については、原則として学生が選んだ本を推薦した教員がそのレポートに

コメントすればよいのではなかろうか。推薦者はその本の内容を熟知しており、学生がどんなレポートを書いているかということに関心を持っていると思われるからである。ただし過重負担を避けるため、事前にコメントできるレポートの上限数を調査し（ゼロ回答も可）、それ以上になったときには、共通教育センターの応援を要請するのがよいであろう。

最後に読書の論題に戻る。二年間の「読書レポート」の上述の結果や、今回の会合や懇親会において拝聴したさまざまな事実や意見から、学生の読書離れは予想以上に進んでおり、深刻な問題であると実感した。学生の文章力の低下も、読書量の減少と密接に関連しているであろう。十分なインプットがなければアウトプットも貧弱になるからである。したがって大学においても、ライティング教育を強化するだけでなく、学生に本と接する機会や時間を増やしてもらうことも考える必要がある。教員がレポート課題としての本を読むことを要求するのみならず、できれば学生が自発的に、楽しみながら読書に親しむ機会を持つてほしいと思う。学生のよい意味での競争心を刺激し、プレゼンテーションやコミュニケーション能力の養成という副産物ともなうビブリオバトルは、そのための非常に有力な手段ではなかろうか。

5 大学図書館における読書啓発の取り組み

佐々木奈三江 (附属図書館司書)

はじめに

徳島大学附属図書館では、大学の学習・教育支援を担う場として、図書館施設・資料の利用を促進するため様々な活動を行っている。最近の活動の特徴は、「学生協働」「教員連携」など利用者とともにすすめていることである。今回の報告では、そういった活動のうち「読書啓発」に焦点をあてて報告する。

学生協働

最近、全国の大学図書館で話題となっているのが「学生協働」である。これは学生が職員とともに図書館の運営にかかわり、さまざまな企画に取り組む活動で、近年多くの大学図書館で取り込まれるようになってきている。

徳島大学附属図書館では、現在「ライブラリー・ワークショップ」「阿波ビブリオバトルサポーター」「学びサポート企画部」という3つの学生団体が活動している。本報告では、読書推進に関わる「ライブラリー・ワークショップ」と「阿波ビブリオバトルサポーター」について紹介する。

<ライブラリー・ワークショップ>

ライブラリー・ワークショップは、2010年に発足した。もともとは図書館のラーニング・コモンズ活性化を図ることを目的に結成されたが、現在は主に読書推進活動を行っている。これまでに行った主な活動は「私のオススメの1冊」という本の紹介プレゼンイベント、ポップコンテスト、本の帯づくり、映画鑑賞会などである。これらの活動は、毎月発行している新聞「Love Library Letter (以下 LLL)」で紹介されている。LLLは館内で配布しているほか、図書館ホームページでも読むことができる。

<http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/pub/libws/love/libraryletter/>

<阿波ビブリオバトルサポーター>

阿波ビブリオバトルサポーターは、徳島県下でのビブリオバトル普及をめざして2013年に結成された。当初は徳島大学の学生、教職員、その他からなる任意団体であったが、現在は、徳島大学公認のピアサポート系団体として活動している。

最初の活動として、ビブリオバトルを知ってもら

ことを目的に、2013年「ビブリオバトル in 徳島」を徳島県立文学書道館とともに実施した。15名のバトラーと100名近い聴衆を集めて、マスコミにも取り上げられた。その後、ビブリオバトルの全国大会である「ビブリオバトル首都決戦2013」にもバトラーを送り出し、特別賞を受賞して注目を集めた。

今年度も「ビブリオバトル in 徳島 社会人×大学生」を開催、「全国大学ビブリオバトル2014～京都決戦～」にも出場した。

阿波ビブリオバトルサポーターは自分たちがビブリオバトルを主催するだけでなく、求めに応じて大学の授業や地域の図書館などに出向きデモンストレーションを行うなどの普及活動も行っている。

<学生協働の成果は？>

何故、学生協働か。図書館にとっては学生目線のサービス展開につながることで、図書館職員の人員不足を補てんすることが出来ること、学生にとってはキャリア教育の機会につながることで、双方に様々なメリットがあるが、学生が「自分事として取り組む」ようになるという点が大きな利点ではないだろうか。このような活動があることで、当該学生のみならず、周囲の学生も図書館の活動を「自分に身近なもの」として感じるようになると思われる。事実、ここ数年来館者数は伸びている。

一方で肝心の図書の貸出冊数は伸び悩んでおり、読書推進の目的が達成されているとは言えないのが現状である。有志による活動であるためこの活動自体の認知度が低いこと、紹介される本は「小説」が多く、しかも繰り返し同じような図書が紹介される傾向があるため、新しい本との出会いに繋がりにくいこと、などの要因が考えられる。これらの解消も含め、いかに読書啓発をすすめるかは今後の課題である。

教員連携

大学図書館がサービスを考える上で重要なのは「大学教育の文脈の中で」考えることである。特に近年は、自ら学ぶ力のある学生の養成が求められており、課題解決型学習への転換や単位の実質化など、授業外での学習の必要性が叫ばれている。その中で、大学図書館としてどのような施設、サービスが必要なのか、教員と連携して検討することが重要になってくる。

徳島大学附属図書館では、これまで教員と連携していくつかの授業を実施してきた。その中で、図書館で話題となっていたビブリオバトルを取り上げたこと

るその教育的効果が注目され、ビブリオバトルを中心とした授業を開講するに至った。それが、2014年度に開講した「読書コミュニケーションへのいざない」である。

<講義「読書コミュニケーションへのいざない」>

「読書コミュニケーションへのいざない」(以下「読いざ」)は、徳島大学の全学共通教育のカリキュラムのうち「さまざまな体験を通して人間力や社会性を身につける科目」として開講される「社会性形成科目群」に含まれる。さらに課題発見・グループワークを行う「共創型学習」に分類され、前期7名、後期6名が受講した。「読いざ」の授業のねらいは「大学生活の中に読書活動を習慣化し、読書を通じた人との出会いによって読書のコミュニケーションを構築していくこと、そして多様な本との出会いにより教養を深め、多様な価値観に触れること」である。「読いざ」は、複数の異分野の教員と図書館職員が参加してそれぞれの立場から読書にまつわる講義を行うことに特徴がある。カフェの読書会(三色ボールペン方式)、Critical Readingで論理的に文章を読む、カルチュラル・スタディーズの手法を用いた本の深読みなどである。このように、読書を切り口として多様な研究手法に触れることで、より深く読書に切り込むことができる授業となっている。さらには、こういったインプットを、ブログやビブリオバトルといった形で楽しみながらアウトプットとすることで自分の力として定着させることを企図している。以下、前期と後期のビブリオバトルについて簡単に触れておく。

●前期

ビブリオバトルの実践にあたっては、徐々にビブリオバトルに慣れていくよう、次のような順序で5回実施した。①「サポーター」によるデモンストレーション②ブログで書評を書いた後にビブリオバトル③戦略ミーティング④好きな本でビブリオバトル⑤テーマ「旅」でのビブリオバトル⑥最終決戦(「サポーター」との対決)。

なお、参加者のモチベーション向上・敗者へのフォロー・ディスカッションを誘発するツールとして、いずれの回も「ビブリオバトルカード」⁽¹⁾を使用した。

●後期

前期の授業では、期間の前半に講義形式の授業を行い、その後ビブリオバトルを実施した。ところがこの

方法だと、後半にビブリオバトルが集中するため、毎週のように本を用意しなくてはならず、かなりの負担があった。また、座学で学んだこと(クリティカルリーディングや本の深読み)がどの程度、ビブリオバトルの内容に影響を与えるのか見てみたい、ということもあり、後期では、座学2~3コマ、ビブリオバトル、座学・・・と交互に行うことにし、全部で3回のビブリオバトルを実施した。さらに、後期ではビブリオバトル等の読書コミュニケーションに関するイベントを企画・実施することを最終課題とした。

1か月かけて準備を行い、平成27年2月4日(水)、授業の総括イベントとして、図書館内で1日限定のブックカフェ「B&C」をオープンさせ、ビブリオバトルや茶話会などのイベントを行った。このイベントでは、ビブリオバトルに24名、茶話会に16名の参加があった。



<講義アンケート>

前期の授業では、ビブリオバトルが本当に新しい本との出会いにつながったのか、シラバスの目的にあるような「多様な価値観に触れる」ような読書ができたのか、検証することを考えていなかった。その反省から、後期では、ビブリオバトルによる変化を見るため、九州大学の事例⁽²⁾などを参考に「ビブリオバトル直前リサーチ」(以後「直前リサーチ」)「ビブリオバトル終了リサーチ」(以後「終了リサーチ」)と名付けたアンケートを行い、簡単に比較分析を行った。なお、アンケート回答者は6名である。分析結果のうち興味深いものをいくつか紹介する。

●ビブリオバトルのイメージ

直前リサーチでは、ビブリオバトルのイメージは「難しそう」「プレゼンがうまくできるかどうか不安」という回答が5名で一番多かったが、終了リサーチで

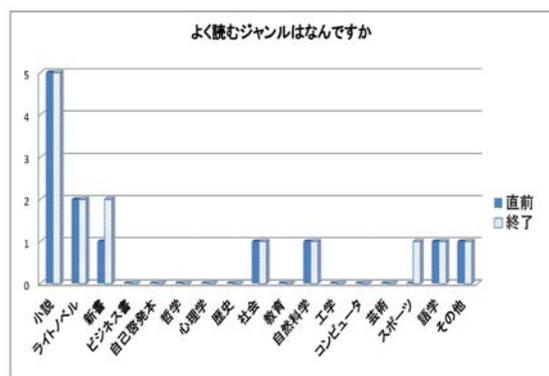
は、6名全員が「楽しかった」という回答になった。ただ、4名が「難しかった」と回答しており、楽しいけど難しい、と感じていることがわかる。

興味深いのは、「プレゼンが得意かどうか」と「ビブリオバトルをしたいかどうか」という質問の回答である。

「プレゼンが得意かどうか」という質問では、「苦手」という回答が2名から3名に増えている。ところが、「ビブリオバトルでプレゼンしたいか」という質問では、直前リサーチでは「そう思う」「どちらかといえばそう思う」あわせて4名だったが、終了リサーチでは、6名全員が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」という回答となった。つまり、プレゼンは苦手だけど、ビブリオバトルならやってもいい、それは楽しいから、という気持ちの表れだと思われる。

●読書の幅は広がったか

「読書の幅が広がったか」という質問では、「そう思う」5名、「どちらかというと思う」1名で、全員が読書の幅が広がったと感じているという結果だった。では、どのくらい幅が広がったのか。「ビブリオバトルで紹介された本を読んだか」という質問に対し、「本を読んだ」と回答したのは4名で、かなりの行動変化かと思われたが、「よく読むジャンルは何か」という質問に対しては、直前リサーチと終了リサーチでほとんど変化は見られなかった。



これは、いつも読んでいたジャンルの中での選択肢が広がった、ということに過ぎないのではないだろうか。そこから多様な本との出会い、多様な価値観に触れる、ということにつながるのか、疑問が残る結果となった。

しかし、たった半年の授業で価値観の変化や教養を身につける、というのは性急であり、行動を少しずつ変えたり広げたりするきっかけになれば、それでもいいのかも知れない。ここでは、難しいけど楽しい、ということが大事であり、簡単にクリアできないことを楽しむことができることが、自ら学ぶ意欲や姿勢につながるのではないだろうか。

良書探索機能

このように連携を深めていくと、やはり図書館は図書館の基本的な機能を向上させて行かないと連携する価値を維持できないことを実感する。

図書館で必要なのは、有用な本を揃え、それらが多くの利用者に出会えることである。

本との出会いを演出する

本との出会いというと、蔵書検索などがあげられるが、これは利用者が自ら手を伸ばしてくれないと届けることができない。いわば、待ちの姿勢のサービスである。これをもう少し、こちらから近づけるようなことはできないか。それが「出会いの演出」である。

例えば、新しいアプローチとして「必要なものを集めて置かない」、というようなことはどうだろうか。授業に必要な本のリストをもって利用者がやって来た時に、必要な本があちこちに散らばっていたらどうか。面倒だと思うかもしれないが、そうやって図書館内を回遊するうちに、ふと本に出会う。セレンディピティ＝幸運な発見を演出できるのではないか。

また、もう一つのアイデアとして、「知識のネットワーク」を体感させるような展示が出来ないかと考えている。つまり「誰かの頭の中」を再現するのである。知識は点としてではなく、網の目となったときに力を発揮する。偉大な先人などの蔵書や話題の人物のオススメの本を並べておけば、その知識の広がりを感じることができるのではないか。専門外の本、趣味の本、そういった積み重ねが新しい創造につながっている・・・そのような事実を感じた時に、図書館が宝の山であることを体感できるのではないだろうか。図書館が目指すのは「創造的読書」のサポートである。

参考文献

(1) <http://www.p-cd.org/2013/11/bb-card.html>
 副島雄児ほか、本を通して仲間を知る：コアセミナーでの試み、九州大学附属図書館研究開発室年報、2012/2012、35/44 (2013)

6 教養ある学生になるために精読と多読が必要なわけ ～クリティカルリーディングの授業を通して

真壁和裕 (総合科学部教授)

緒言

この節では、「徳島における若者読書文化形成プロジェクト ―地域と他大学連携によるビブリオバトル (知的書評合戦) の実践から―」の活動と並行して行われた、徳島大学の全学共通教育における社会性形成科目「読書コミュニケーションへの誘い」(以後、本授業とよぶ)での活動に関して、主に私が担当した「クリティカルリーディング」の報告を中心に述べると共に、若者に読書文化を植え付けて教養ある学生を育成するためにはどうしたらよいかについて考える。

本授業は、少人数での双方向型の共創型授業のひとつとして平成 26 年度から前期および後期にそれぞれ開講され、総合科学部の教員及び図書館職員からなる 4-5 名と総合科学部、医学部、歯学部を受講生 6-7 名とで行ったものである。

クリティカルリーディングのトレーニングから見たもの

そもそも学生にクリティカルリーディングを経験させようと考えたのは、実験レポート等において、イントロダクションがその後に行う実験や調査に結びついていない、自分が見た結果を羅列するだけで解釈がない、感想はあっても考察がない等々の不備が普遍的に見られることによる。すなわち、問題の提起から将来の展望までの一貫した「物語」として、レポートを論理的に構築する力がない。同時に、文章表現上の問題も常に多数散見される。細かい修辞上の技術であれば、例えば本田¹などにしたがって修正することが可能かもしれないが、多くのレポートは、日本語の技法以前に、論旨が一貫しない、述語が主語を受けない、語彙が乏しく場合によっては誤っている等の基本的な部分に欠陥がある。読みやすい文章を書けるようになることはすべての学生にとって重要な課題であるばかりでなく、とりわけ理系学部が多い本学においては、論旨の明確な文章を書けることは遠くない将来に報告書や論文を書くために不可欠の能力である。これらの問題は、アウトプット自体ではなく、アウトプットに必要な精読体験の少なさに起因しているのではないかと考え、まずは他人が書いた文章の論理構造を理解して正しく理解できるように、クリティカルリ

ーディングに関する授業を行った。

授業前半ではまず、ひと口に読書と言っても速読や斜め読みから精読まで様々な形態があり、同時にそれぞれが担う機能も異なること、そしてそれらに応じて、読書の楽しみ方にも、目的や読み方、情報共有等の違いなどによる複数種類があることを示した。読書コミュニケーションの文脈では共有の程度による分類が重要となる一方、クリティカルリーディングの文脈では読み方の違いが重要である。読む量と読む速度とを二つの軸にとると、読書形態は、比較読み、多読、速読、精読などを典型とする 4 つに分けられる。同時に、梅棹²によれば、追隨的消費的読書と批判的/創造的/生産的読書とに分類することも可能である。クリティカルリーディングの観点からは、精読や批判的/創造的/生産的読書が重要であり、そのためには、質的にある程度以上の負荷のかかった本を一定数以上、しかも一定時間内に読むトレーニングが必要であるとの指摘もある(齋藤³) ことなども示した。

次いで、クリティカルリーディングの概要を解説し、「(他人を) 説得/ (自分で) 納得」できるためには、妥当な根拠、妥当な論拠、妥当な結論が不可欠であることを示した。そのうえで、それぞれの妥当性を確認するためにはどうしたらよいかを、福澤⁴から採った具体例に即して解説した。

後半では、クリティカルリーディングの実践として、まず 4 段落ほどのごく短い論説文を例にとり、そこで示されている根拠、論拠、結論などを抽出して見せたいうで、別の短い論説文を学生に与えて同様の作業をトレーニングとして課した。また、前期においてのみであったが、夏目漱石の「趣味の遺伝」の後半部 20 ページほどについても同様に分析する宿題をトレーニングとして課した。

その結果、文章を分析・解析する力の不足が明らかとなった。話の筋道は理解できているにも関わらず、事実と推論の区別が曖昧になることなどは、レポート等を書く際にも見られていたことであるが、読む側に立った場合にも起こっていることが、今回初めて明らかとなった。サンプル数は少ないながら、本授業では読書の好きな学生が選別されているであろうことを考えると、齋藤による授業(本報告書、第 8 節)においても同様のことが観察されたこととも併せて、問題は深刻であると思われる。今回教材として扱ったものは短い文章であったため、個々の文に拘泥せずに文章全体を俯瞰することは比較的容易であったと推測されるが、たとえ速報であっても数ページになる通常の

論文において、文章の構造を読み取ることができるようになることは、徳島大学の学生にとって喫緊の課題であろう。

ビブリオバトルの効用とその限界

前項で述べたように、学生ひいては若者の精読能力は総じて低いことが予想され、今後飛躍的に伸ばす必要があると考えられる。一方で、読書に関する民間の経年調査によると、10代から60代の男女のうち1年に1冊以上本を読む人の割合は、2011年の81.5%から、75.6%（2012年）、72.3%（2013年）と漸減傾向にある（ライフメディア⁵）ものの、年代別（20代から60代）に調べたと称するweb記事⁶など、男女共に20代の読書率が最も高いという主張もある。さらに、過去31年間に渡る公益社団法人全国学校図書館協議会の調査⁷では、小中高生の平均読書冊数（5月1ヶ月間）は漸増傾向にあり、2014年は過去最高の値となっている。ただし、増加の割合は、小学生>中学生>高校生となっており、大学生協が継続的に行っている生活実態調査⁸によると、大学生ではほとんど変化がない。この実態調査からは、読書時間「0」の学生がこの10年間ほぼ横ばいで約4割いること、1日の平均読書時間は30分程度であることなどが窺える。これらのことから、今の大学生は、以前に比べて特に読書しなくなったわけではないが、絶対値としての読書時間が少なく、教育課程（学年）の進行と共に進んだ読書冊数の増加率の鈍化が極度に達しているのではないかと考えられた。

裾野が広くなければ山が高くならないように、文章を書くアウトプットの増大のためには読書というインプットの増大が必要であり、クリティカルリーディングのような難易度の高い読書のためには、難易度の低い読書をその数倍量以上こなすことが必須である（齋藤⁹）ことから、大学生に向けて多読を促す「仕掛け」が必要であることは、論を俟たないだろう。俗に「内向きで見知らぬ人よりも仲間内でつきあいが好き」とも言われる現在の若者の気質とも考え併せると、本報告書の他の節でも明らかにされているように、ビブリオバトルはその点で大変優れた「仕掛け」である。ビブリオバトルを通じて読書に対するハードルが下がり、同時に読書コミュニティという友人の輪が広がって学生の内向き志向が多少なりとも希釈されるならば、若者の読書文化の形成という目標は半ば達成されたと言ってもよいのかもしれない。しかし、通算2期の本授業及び徳島大学内で行われたビブリオバトル

の様子を観察する中で、ビブリオバトルの限界もまた垣間見えてきている。個々の学生に着目して変化を追ってみても、数回のビブリオバトルの前後で読書の幅が大きく変化することはなかった。すなわち、他のバトラーなどに影響されて、それまで手に取ったことのないジャンルの本や他の作家の本に手を伸ばすことがほとんど見受けられなかった。これは、我々教職員の側が学生たちの提示する本に興味を抱いて読むに至ったことと対照的である。まず読書の数をこなすことは重要であるが、その次の段階として、読書の幅を拓けることによって、語彙を増やし、知識を拓げ、文章力を高め、ひいては教養を深めることが求められる。当初はそのエンジンとしての知的好奇心を育てることに対してもビブリオバトルが有効であろうと予想していたが、ビブリオバトル単体では容易にそうならないことが分かった。このような偏った読書傾向は、実は若者ばかりでなく、世代を超えて見られるようである（ライフメディア⁵）が、その一方で、若者の読書の幅が拓げられないことは、井戸（本報告書、第3節）にもあるように、あるいは若者が世代を超えて共有すべきだと考える「大人としての教養」としての書籍が失われたこと、もしくは背伸びをしてまでそうした本を手にとらずに「身の丈に合った」軽い本を読むだけで満足してしまうようになったことの証左かもしれない。また、そうした傾向は、頭の中に書籍からの知識を蓄えなくても、必要に応じてスマホからweb上の知識にアクセスすれば事足りるようになった（気がする）せいなのかもしれない。もしそうであれば、知的好奇心の有効な育成には、彼らにとってより魅力的な何か別の「仕掛け」を別途用意する、もしくはビブリオバトルにそうした「仕掛け」を組み込むなどの工夫を要するだろう。

課題と展望

そうした「仕掛け」のひとつとして、本授業の後期に「他人が興味をもっているジャンルについて、普段の自分なら手に取らない本を図書館で探して読んだうえで、ビブリオバトルで発表する」という試みを行った。これは知的好奇心の育成のための「仕掛け」であることに加えて、ひとつには、文献や書籍が電子化された結果、学生にとって図書館が「蔵書データベースの検索端末」に成り下がってしまう危惧に対するささやかな挑戦でもあり、またひとつには、我々授業担当教職員たちの「本との出会いはセレンディピティである」という思いを学生に体験してもらおうというギフト

トでもあった。本授業を含めて学内で行われた従来のバトルに比べると、バトラーのプレゼンテーションはお世辞にも上手くなく精彩を欠くものになったが、普段読まない本との出会いという観点では、学生には新鮮な経験であったと同時に、事後のアンケートでも「読書の幅が広がった」という回答が多かった（佐々木、本報告書、第5節）ことから、小さいものではあるが読書の幅を広げるひとつの契機となったと思われる。

しかし、若者の読書の幅を広げるためには、より多くの良いアイデアが必要である。懇談会で森井氏が「滝を浴びるような」（本報告書、第9節）と表現した“超多読”を勧めることもひとつの有効なやり方かもしれない。あるいは、自発的な読書の促進のみならず、多少の強制性をもたせることも視野に入れることを考慮してもよいかもしれない。なんとすれば、スマホから簡単にアクセス可能な、しかし時代の変化と共にすぐに陳腐化してしまうに違いないweb上の知識とは異なり、教養とは知識をハンドリングする技法や自分に足りない知識を正確に測って補う技法を身につけるということに他ならず、数千年前から教養人たちに継承されてきたそうした技法の習得には、伝統芸能の継承者がそうであるように、半ば強制された過去の蓄積の多量のインプットが不可欠であるからである。そのような見地に立ってみれば、人文科学系から社会科学系、自然科学系や医学系、さらにはマルチメディア系や芸術系に至る広大なスペクトルを備えた徳島大学総合科学部の長所を活かして、各教員が推薦する良書の中から総合的な観点から厳選したものを「徳島大学版読書マラソン ～教養のある若者のための蔵書コレクション」といったセットとして、デアゴスティーニなどの商品のように各回千円程度で毎週ないし隔週1冊ずつ4年間に渡って届けるサービスを新入生対象に通信販売するのも、私が小学生だった頃に学研の「学習」を毎月心待ちにしていたことを思うと、面白いのではないだろうか。

参考文献

1. 本多勝一 (2005) 「新装版 日本語の作文技術」, 講談社
2. 梅棹忠夫 (1969) 「知的生産の技術」, 岩波新書
3. 齋藤孝 (2002) 「読書力」, 岩波新書
4. 福澤 (2012) 「文章を論理で読み解くためのクリティカル・リーディング」, NHK 出版新書
5. ライフメディア (2013) 「リサーチバンク 読書

に関する調査」

http://research.lifemedia.jp/2013/10/131030_reading.html

6. ライブドアニュース (2014) 「若者の活字離れってほんど? 「最も本を読む世代」を調査してみた」

<http://news.livedoor.com/article/detail/9276123/>

7. 公益社団法人全国学校図書館協議会 (2014) 「第60回読書調査」の結果」

<http://www.j-sla.or.jp/material/research/54-1.html>

8. 全国大学生生活協同組合連合会 「第50回学生生活実態調査の概要報告」

<http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>

7 創造的読書に向けて—「謎とき読書」実践報告

笹尾佳代 (総合科学部准教授)

1. はじめに

本節では、第6節に引き続き、「徳島における若者読書文化形成プロジェクト」と並行して行った全学共通教育授業、「読書コミュニケーションへの誘い」に関する報告を行う。

私が担当したのは、小説を対象にした「「謎とき読書」をしてみよう」という試みだ。小説の「謎とき」を掲げた図書には、江川卓『謎とき『罪と罰』』(新潮選書, 1986)とその続編『謎とき『カラマーゾフの兄弟』』(同, 1991), 『謎とき『白痴』』(同, 1994)や、石原千秋『謎とき 村上春樹』(光文社新書, 2007)などがある。こうした試みを参照にしながら、ストーリーを追って楽しむことに留まらない、創造的読書を目指した。

「ああも読める, こうも読める」という地点に留まっていたら、謎を解いたことにはならない。謎を解くために重要なのは、解釈を導き出す根拠があることである。もちろん、たった一つの「正解」などは無いが、「謎が解けた!」という思いになるためには、根拠をもとに論理を積み上げる必要がある。なるほど、この枠組み/視座においては、こう解釈することができる、という説得力が生じれば(成功)だといっている。

「面白かった!」「泣けた!」という言葉は、小説が紹介されるときによく用いられるが、小説のよさはこうした情緒的な言葉では伝わらない。何がどのようによいか、優れているのか、その小説の可能性や価値を論理立てて話すことが必要とされる。「なぜだろう?」という問いを立てて、答えを探求する「謎とき読書」は、読者自身が自分の心の動きと向き合うことになるだろう。それは、感情に言葉を与えることにも通じるはずである。

2. 「謎とき読書」の実践

2-1 分析対象

分析対象には、太宰治「走れメロス」を選んだ。国語教科書に掲載されているこの作品は、受講生の多くがすでに読んでおり、「友情の強さ」「信念の大切さ」といった解釈を行った経験がある。そのため、「謎とき読書」を通じた、発見的な読書体験の体感が容易で

あろうと思われたからである。

しかし一方で、学校教育の中で導きだされた〈正解〉によって、物語内の特徴(特に奇妙な点)を捉え逃してきた感も否めない。そこでまず、「走れメロス」の表現の特徴を確認し、表現に仕込まれた「謎」を確認することにした。その方法は、「走れメロス」の典拠となったシラーの詩との比較である。

2-2 典拠との比較から

「走れメロス」の末尾には「古伝説とシルレルの詩から」という記述がある。ギリシャ神話のエピソードと、ドイツの詩人フリードリヒ・フォン・シラーの詩をもとに創作されたことが明らかにされているが⁽¹⁾、授業内では、シラーの詩「人質」と「走れメロス」との比較を行った。

浮かび上がってきた大きな違いは、以下のようなものである。

- ① 「暴君」ディオニスの人物造形
- ② メロスの心情の加筆
- ③ 走るメロスの姿の描写(特に結末部)の加筆

授業を進める上でまず着目したのは②「メロスの心情の加筆」についてである。それは例えば、次のような部分である。

私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。
身代りの友を救う為に走るのだ。王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。走らなければならぬ。そうして、私は殺される。若い時から名誉を守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかった。幾度か、立ちどまりそうになった。えい、えいと大声挙げて自身を叱りながら走った。

傍線部にあるように、メロスは走るにより大きな意味を与えている。さらに、メロスがくじけそうになった時の次の描写もシラーの「人質」には見られない。

ああ、もういっそ、悪徳者として生き伸びてやろうか。村には私の家が在る。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すような事はしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。ああ、何かか

も、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。

こうした描写は、「勇者メロス」の弱さの表現として、いったん了解されるだろう。しかしなぜ、「殺されるために走る」といった言葉や、「正義」「真実」「愛」への懐疑が示されているのだろうか。特に「正義」という言葉は、走るメロスによって繰り返し語られている。ここに一つの表現の特徴＝解くべき「謎」が見出される。

また③「走るメロスの姿の描写（特に結末部）の加筆」の奇妙さも、一読しただけではよく分からないものである。走るメロスは、酒宴の真ん中を横切ったり、犬を蹴飛ばしたりと、周囲が見えていないようだ。あげくの果てには、結末部で少女からマントが渡されるように、全裸となっていた。こうした滑稽さは、「友情の強さ」「信念の大切さ」といった解釈に収まるものではない。加筆されている生死の問題、「正義」という言葉ともちぐはぐな印象がある。こうした部分も、「謎」として浮上した。

2-3 解釈の枠組み—コンテキストを重視する

「謎」を解くためにここで重視したのは、文脈/背景（＝コンテキスト）についてである。メッセージの意味は、コンテキストに依拠している。（例えば、「バカ」というメッセージが、発せられた文脈によって大きく意味を変えることは容易に了解されるだろう。）そこで、「走れメロス」というメッセージが初めて発せられた時のコンテキストに注目し、メッセージを読み解くための枠組みとして設定した。

「走れメロス」は、1940年5月に雑誌『新潮』に発表された。1940年というコンテキストにおいて発せられたメッセージであることに留意し、作品の特徴的な表現を読み解くこととした。そこで意識したのは、

カルチュラルスタディーズ
「文化研究」というアプローチである。「文化研究」とは、小説の表現を、その周辺にあった他の言説との関係の中で読み解こうとするものである。小説表現に特徴的な表現や事柄が、その小説が発表されたコンテキストにおいてどのような特徴/偏りを持って語られていたのかを調査の上で確認し、それと照らし合わせながら小説表現を分析する。

具体的に調査を行ったのは、「正義」という表現についてである。先に示したように、この言葉はメロスによって、くり返し語られており、「人質」と比較する

ときに特徴的な表現として浮かび上がってきたものであった。山賊を打ちのめす際にも、メロスは「正義のためだ」と叫んでいる。走ることの大義となっているのである。

2-4 調査のためのツール

作品の「周辺にあった他の言説」を調査するためには、デジタル化資料を用いた。近年、国立国会図書館のデジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp>) や、近代デジタルライブラリー (<http://kindai.ndl.go.jp>) など、フリーで使うことのできるデジタル化資料が飛躍的に増加した。これまで国立国会図書館に赴かなければ見ることが出来なかった歴史的資料も、図書館間の連携によって、例えば県内では、徳島大学図書館・徳島県立図書館において手軽に見ることができるようになった。また、徳島大学図書館ホームページ上で公開され、学内からアクセス可能な朝日新聞のデータベース「聞蔵Ⅱビジュアル」

(http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/database/kikuzou2_login.html) も、ある事柄の、その時々における語られ方の特徴を調査する上で、有用なツールである。もちろん、詳細な分析のためには、デジタル化資料のみでは不十分であるが、手軽に時代の空気に触れられるものとして、これらの有用性は高い。

2-5 メッセージとしての「走れメロス」

以上のようなツールを用いながら、1940年頃の「正義」という語の語られ方の特徴を調査した。その結果得られたことを端的に述べるならば、「正義」という表現が、当時の戦争をめぐる文脈において積極的に用いられていたことである。

周知の通り、1931年の満州事変、1937年の日中戦争開戦というように、1940年頃の日本は戦時体制にあった。そうした中で、「正義」という言葉は、戦争の大義を説明し、正当化するものとしてメディア上で数多く報じられていた。そして、このような背景に留意する時、「正義」のために命を捧げるメロスの姿が、ある人々に重なりあうことに気づく。メロスが走り始める際の言葉を再び確認してみよう。

私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。身代りの友を救う為に走るのだ。王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。走らなければならぬ。そうして、私は殺される。若い時から名誉を守れ。さらば、ふるさと。



「正義」のために命を掲げ、「名誉」を挙げるために「ふるさと」を去る。それは、出征兵士の姿を容易に連想させるものである。

このように、当時のコンテキストを確認し、その関係性に注目する時、メロスの言葉や、その姿が、これまでとは異なる意味を帯びてくる。

「正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。」というメロスの言葉は、まさに、「人を殺して自分が生きる」という戦時下に、そしてそれが疑うことのない「正義」だと意味づけられている状況の中におかれていたことを考慮する時、そうした事態への批判となり得ていることに気づくのだ。

以上のように、表現の特徴を「謎」として意識し、読み解くことを通して、「走れメロス」には様々なレベルでの戦争批判が見出されることを確認した。周囲を顧みないメロスの様子も、結末部が賞賛ではなく滑稽な描写で終わるのも、「正義」というものの〈絶対性〉を疑う太宰治の思いが背後に見えてくるようである。注意深く読むと、メロスの行動には他にも矛盾が見出され、「正義」を实践する「勇者」として手放しには評価できない。典拠との比較から浮かびあがった①「暴君ディオニスの人物造形」も、「正義」と「悪」が固定された関係ではないことを示すものになっていることなども確認した。

1940年に関する図書は、数多く刊行されている。それは、日中戦争の長期化から幻となった東京オリンピックをめぐるもの⁽²⁾、神武天皇即位から2600年目という虚構の紀元を祝う皇紀2600年の祭典をめぐるもの⁽³⁾などである。小説の精読は、時に思いがけないところにまで読者を導いてくれる。

1940年は、今日の日から見ると、翌年の太平洋戦争開戦を前にした、ターニングポイントとも言うべき年であった。太宰治はその渦中であって、「走れメロス」

という物語に戦時体制への懐疑と批判といったメッセージを託していた。思想統制が進み、検閲が厳しかった当時であって、それは虚構表現にのみ開かれた可能性であっただろう。

3. おわりに

「謎とき」をタイトルとして掲げた一番の理由は、解かなければならない「謎」にぶつかるような、重みのある表現にじっくり向き合って欲しいという思いからである。ストーリーを追って楽しむことが読書の一つの醍醐味であることはもちろんだが、何の引っかけもなく「分かる」物語は、実は読者の関わりを拒んでいる。しかし、多くの「謎」をそなえた物語は、読者がどのように関わるかによって、見せる光景を変えていく。長く読み継がれてきた古典的作品ほど、その光景は多様であるはずだ。

教養が重視されなくなってしまった今、世代を超えた対話のプラットフォームとなるような読書体験が不足していると感じることが多い。読書を通じたコミュニケーションの可能性は、やはり教養としての読書に求められるのかもしれないと、改めて思う。

参考文献

- (1) 高山 裕行「「走れメロス」素材考」(『日本文学』34-12, 1985. 12)、石橋 邦俊「太宰治「走れメロス」とシラー「人質」」(『九州工業大学大学院情報工学研究院紀要』27, 2014. 3) など。
- (2) 橋本一夫『幻の東京オリンピック 1940年大会 招致から返上まで』(講談社学術文庫, 2014) など。
- (3) ケネス・ルオフ(著)・木村剛久(訳)『紀元二千六百年 消費と観光のナショナルリズム』(朝日選書, 2010) など。

8 大学教育における読書の位置付けを考える 齊藤隆仁（総合科学部准教授）

はじめに

読書するという行為が大学教育の中で改めて取り上げられてきている。それは単に徳島大学内だけのことではなく、国公立大学でも私立大学でも、あるいはいわゆる学力の高い大学から低い大学までの取り組みとなっている。こうしたここ数年の日本の状況は、これまで数十年にわたる大学教育における読書の位置づけとは明らかに異質であると感じている。

この節では、日本の教育政策の変遷、そして読書を活用したアカデミック・ライティング教育のいくつかを紹介するとともに、読書を取り入れた授業の評価の一考を述べる。

日本の教育政策の変遷

第2次世界大戦後に導入された新制大学においては、教養部による一般教育と学部による専門教育の2階建て構造であった。1991年に臨時教育審議会の答申「大学教育の改善について」が出され、大学設置基準が改正され、一般教育内の科目区分が廃止された（大綱化）。これにより学部は教養と専門を自由に編成できるようになり、体系的に教育することが可能となった。こうした大学改革をうけて、日本の大学から教養部がすべてなくなった。この当時の教育改革は、多くの場合、組織改編という形に集約され、大学生がどういった学習を経て、学士レベルの資質を備える人材であるべきかという議論が少なかったように思われる。

知識基盤社会といわれる現代の状況に加え、開発途上国の急激な成長、長引く日本の不況により企業が即戦力のある人材を求めるといった状況などを背景として、経済産業省は職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な3つの能力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）を社会人基礎力として定義づけ（2006年）、大学の教育改革を迫った。そうした中で、文部科学省は初等・中等教育ではいわゆる「ゆとり教育」をやめ、2011年から段階的に新学習指導要領に移行してきており、そこでは「生きる力」を育むという理念を掲げ、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視している。

大学教育については、中教審答申「学士課程教育の構築に向けて（2008年12月24日）」において、卒業にあたっての学位授与の方針を具体化・明確化し、積

極的に公開することを求めた。具体的には学士力として次の4項目

1. 知識・理解（文化、社会、自然、等）
2. 汎用的技能（コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力 等）
3. 態度・志向性（自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任 等）
4. 統合的な学習経験と創造的思考力

を例示し、各学科ごとに具体的な内容をディプロマ・ポリシーとして示すこととなった。これまでの大学においては、学問の体系に沿ってカリキュラムが編成され、単位の履修を通じてそうした知識を体系的に身につけていることが保証されていたが、それは「知識・理解」に集約されていく。またゼミや卒業研究などを通じて「総合的な学習経験と創造的思考力」も担保されていたであろう。この中教審においては、社会人基礎力にも登場した「汎用的技能」と「態度・志向性」を明示したことが大きな特徴である。もちろんそれまでの大学教育においても、そうした能力は、様々な授業を通じて獲得されていたであろう。今回、そうした力を明示し、それをカリキュラムの中に組み込んでいく、すなわちカリキュラム・ポリシーを策定していくことを通じて、どこでそれらの力をつける授業が行われるのかを可視化することが答申の趣旨であった。

上の答申が、学ぶ内容を定義するものだとすると、学ぶ方法の変更を求める中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（2012年8月28日）」が出された。知識を基盤とした自立、協働、創造による成熟社会を目指すために、予測困難な時代においてこそ学士力が重要であり、①学士力を育むためにはディスカッションやディベートといった双方呼応の授業やインターンシップ等の教室外学修プログラムによる主体的な学修を促す学士課程教育の質的な転換、②主体的な学修を積み重ねるために、質を伴った学習時間の確保、の2点の転換を求めた。

こうした教育方法はこれまでの日本の大学教育では大きく取り上げられてこなかったが、先行する海外の事例をもとに、アクティブ・ラーニングと呼ばれる教育方法がクローズ・アップされている。アクティブ・ラーニングは広い概念であるが、文部科学省の用語集では「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、

経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」とされている。また徳島大学においては、「徳島大学が推進しようとするアクティブ・ラーニングは、教員による一方的な知識伝達とは異なり、課題演習、質疑応答、振り返り、グループ・ワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等を取り入れることにより、学生自らが考え抜くことを教員が促し、学生の能動的な学習を促進させる双方向の教授・学修のこと」と定義している。

読書、アカデミック・ライティング教育の事例紹介

インターネットの爆発的な普及と、さらにeラーニング、MOOC (Massive open online course 無料で受講できる大規模講義)などの台頭によって、学力における「知識・理解」の相対的な重要性は下がっているであろう。それにもかかわらず、私自身は、これまで以上に大学の存在が重要であり、学生にとって学ぶ価値がある場であり続けると考えている。その理由として大学は、①授業、②古今東西の知を集積した図書館などを活用した教育、③世代を超えて議論し学び合う場、において知の体系化を行っているからである。こうした場においては、多様な価値観を深く知り、学習者が互いに刺激しあいながら、それぞれの価値観を築いていくこととなる。議論を深いものとするためには、教科書に書かれている概説のみの理解を超えていくことが大切であろう。そうした教育の方法として、読書そしてアカデミック・ライティングの事例のいくつかを以下に紹介する。

岩手大学では、図書を1つの情報として読み込み、そこから適切な情報を引き出し、簡潔でわかりやすい文章としてまとめることを通して、自分の考えを深める力を養うことを目的として、入学前学習として、読書レポートを課している¹⁾。学生は、本を批判的に読んだ経験がない、また、感想文でなく自分の考えを文章にした経験が少ないという実態が報告された。こうしたことから、初年次教育において、文章の書き方の授業のパッケージ化をすすめているとのことである。

北海道大学では、学士課程の前半では普通言語の訓練、すなわち討論を重視し、平易な言葉で科学を語る力を養う学習戦略の後に、学士課程後半では専門言語の訓練(論文指導重視の学習戦略)が行われている¹⁾。

帝塚山大学では初年次教育において、パーソナル・ライティングを導入している²⁾。文章力の向上のための試みであり、そもそも文章力の低下の原因としては自己認識が機能していないという判断から、内面を掘り下げるエッセイを書かせるとのことである。一度書いて終わりではなく、対話、相互批評などの粘り強い推敲を通して表現を作品に仕上げていくことを通じて、自己認識を高める試みである。

大阪大学では、全学出動体制を目指したアカデミック・ライティング指導を2014作成するとともに、FDを実施しているとのことである²⁾。

早稲田大学においては、書き方を指導する学生を組織することで、「自立した考え手」を育てる実践を行っている¹⁾。

また、徳島大学においては、2008年より名著講読の授業が共創型学習の中で行われている。それに加え、2013年度より大学入門講座の授業内において読書レポートを実施することが共通教育センターの提案により開始された。2013年度以降、共創型学習のいくつかの授業の中で、ビブリオバトルが行われはじめた。また、講義ごとに学習に必要な図書を紹介する授業サポートナビ、教員が「新入生にすすめる私のこの1冊」の冊子作りなどの図書館の活動も活発である。

読む、書くということは教育の原点でもあるにもかかわらず、上述の多くが現在進行形として報告されるということは、アクティブ・ラーニングの重要性に気付いた教員が、まずは個人で始め、そして大学全体に広がってきていると解釈している。

読書を取り入れた授業の評価

私自身も、教養の授業「科学技術と持続可能な社会」、「地球環境と持続可能な社会」において様々な本を紹介し、その本に基づいて学生が議論をする場を設けている。そうした場面において、これまで戸惑いを感じていたのが、どうやって学生が本を読みこなしてきたのかを評価したらよいかという点であった。本に書かれている内容そのものを知識として理解しているかを評価するのであれば、ペーパーテストでよいであろう。しかしながら、それは前述の「知識・理解」の評価に過ぎない。授業そのものは、「汎用的技能」を伸ばすために行っているため、議論し、レポートを書いて相互評価する、発表するというところに重きを置いている。そうした場合、レポートなり、発表報告といった出力を評価することになる。すると、読書の質といった入力部分はいったいどうするのか、という問

題が置いてきぼりになってしまう。さらには、「態度・指向性」といった、学習者の主体性に関わる部分についても、学習者がどこまで授業を通じて伸ばすことができたかという評価よりは、むしろ本人がもともと持っていた資質がレポート・発表の出力に反映されることになる。

また、読書を通じて汎用的技能を伸ばしたとしたら、それをどのようにしたら、学生が自己評価できるのだろうか。また大学では、1つ1つの授業で力を伸ばしながら、カリキュラム全体で一定の力がつくことを担保するためには、そうした能力がついていることを可視化していく必要があるであろう。さらには、新学習指導要領においても思考力・判断力・表現力を伸ばすとしており、そうした教育に対応した大学入試が高大接続改革実行プラン（文部科学省 2015 年 1 月）において検討されている。

こうした大学における評価の問題を解決するヒントの一つがルーブリック評価にあるのではないかと考えている。ルーブリック（rubric）はラテン語の「rubrica=朱書き」の意で、重要箇所や規則を強調する宗教用語が語源であるが、学修成果（ラーニング・アウトカムズ）を指標として示し、学生と教員が相互に学修の質的な成果を確認しあうことにより成績評価に作成・活用されるものである。具体的事例として、徳島大学 SIH 道場のラーニングスキルとして「プレゼンテーション力」を評価する際のルーブリックを表 1 に示す³⁾。

この評価は、汎用的技能や態度・指向性といったペーパーテストでは従来評価しにくい事柄を評価している。また、本人の自己評価を授業前と授業後に行うことで、授業を含むその学期のパフォーマンスの向上も可視化することができるであろう。残念ながら、読書とルーブリックを結びつけて考えたのが、ごく最近のことなので、まだ実際に授業で使ってはいない。評価を個々の授業で確立し、そうした評価を様々な授業で持ち寄り、カリキュラム全体としてどのような力を学生が身につけてほしいのか（教員サイド）、身につけたいのか（学生サイド）の対話がなされることを夢見ている。特に読書については、「知識・理解」でない力の基礎となることが大いに予想される。そうした点を大学全体で共有することができるためにも、今現在、徳島大学等で盛り上がっている、読書を活用した教育をさらに充実させていきたいと考えている。

課題	体験学習「大塚国際美術館見学」において学んだことや感じたことを整理し、3分間のプレゼンテーションを行って下さい。また、プレゼンテーションの際に聴衆に対して配布するための資料として、A4 用紙 1 枚に発表内容をまとめて下さい。
----	---

観点	尺度	評価基準
内容の構成	A	理由（根拠と論拠）と結論（主張）をわかりやすい順番で構成している。
	B	理由と結論の順序については、意図をくみ取ることができるが、改善の余地がある。
	C	理由と結論がわかりやすい順序で構成されていない。
姿勢	A	説明する内容を聞き手に理解してもらおうとする姿勢（発声、視線、表情、体の姿勢）がある。
	B	説明する内容を聞き手に理解してもらおうとする姿勢が感じられるが、発声、視線、表情、体の姿勢のうち、不十分な点が 1,2 か所程度ある。
	C	説明する内容を聞き手に理解してもらおう姿勢がなく、淡々と発表をこなしている。
視覚資料	A	必要な情報がすべて盛り込まれており、また無駄な情報がなく「見せる」視覚資料になっている。
	B	必要な情報の一部が不足している、または無駄な情報があり「読ませる」視覚資料になっているところがある。
	C	必要な情報が不足している、あるいは無駄な情報があり「読ませる」視覚資料になっている。

表1 ルーブリックの例

参考文献

1. 大学教育学会誌, Vol. 36 No. 2
2. 大学教育学会第 36 回大会概要集 (2014 年)
3. 徳島大学 SIH 道場 アクティブラーニング入門テキスト

おわりに

本報告書では、徳島大学総合科学部地域交流プロジェクト「徳島における若者読書文化形成プロジェクト―地域と他大学連携によるビブリオバトル（知的書評合戦）の実践から―」の活動を中心に、徳島大学総合科学部と附属図書館などによる読書推進活動を報告してきた。特にビブリオバトルの活動は徳島県下において一定の効果があったということを示明らかにした。しかし、それとともに、いかに若者の読書の幅を広げるかという課題も浮き彫りになった。また読書レポートや附属図書館での学生協働の取り組み、読書による汎用的能力の養成とその評価の仕方についての報告もあり、有意義な成果と今後の課題へのヒントを得ることができた。

とはいえ、読書推進活動は一朝一夕で片がつくものではない。成果は見えにくく、特効薬のようなものも見当たらない。しかし、だからといって絶望する必要もない。ことが劇的に変わる性質のものではない以上、ちょっとしたことから始めるしかないが、その「小さな一歩」で少し、しかし確実に事態が変わるのも、この活動の特徴でもあるからである。朝の10分間読書運動が小中学生の読書習慣を変えたことは、最近の読書世論調査の結果からも見て取れるだろう。その意味で「小さな一歩」と継続性が、ともすれば絶望的になりがちな読書推進活動をする者にはなにより大切である、と私は考える。

読書推進活動にここまで携わってきて、私は学生協働が一つの突破口になると思っている。学生が主体的に動き、同じ目線で読書活動を刺激し合うという仕組みを作ることが大切なのではないだろうか。しかしそのためにも、私たち教職員は単にサポートするという受け身の姿勢をとっているだけでなく、自らより積極的にその活動の輪に入っていく、自らも楽しみながら、周囲を巻き込んでいく活動を試みていくべきだと思っている。また、それが自らまず

「踊り」、そして渦潮のように周りを「巻き込んで」いく、そうした徳島ならではの活動になればとも願っている。

本報告書はいわばそうした「小さな一歩」の試みとして、読書率の低いとされてきた徳島県に若者読書文化を形成しようとする大学のプロジェクトを紹介するものだった。関係する方々の関心を呼び、志を同じくする方々の励みになれば幸いである。

平成27年3月30日

プロジェクト代表・依岡隆児

『第2回読書懇談会「徳島における若者読書文化の形成」の報告・徳島大学総合科学部・地域交流プロジェクト「徳島における若者読書文化形成プロジェクト―地域と他大学連携によるビブリオバトル（知的書評合戦）の実践から―」より』

印刷：2015年3月25日

印刷所：教育出版センター

発行：徳島大学総合科学部・地域交流プロジェクト「徳島における若者読書文化形成プロジェクト―地域と他大学連携によるビブリオバトル（知的書評合戦）の実践から―」（代表・依岡隆児）